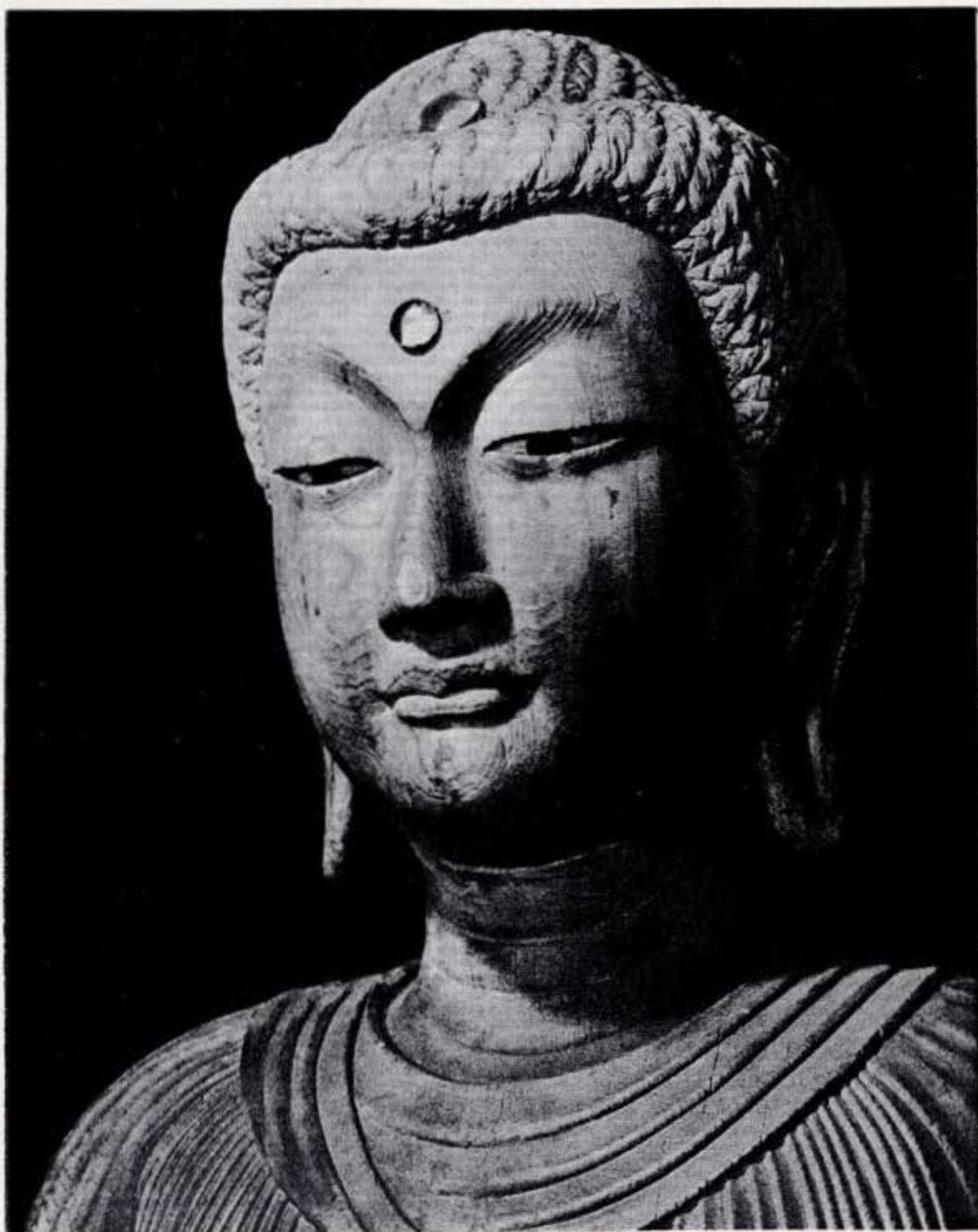


浄土

十二月号



法然上人鑽仰会

昭和十月五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四月四月二十八日 運輸省 (特別授受承認誌第三五二号)
昭和四十年十一月二十五日 印刷 昭和四十年十二月一日 発行

第三十一卷

第十二号

釈迦如来立像

鎌倉 極楽寺蔵

極楽寺の開山である忍性（にんしょう）は多くの社会事業に身をうちこみ、貧しい人びとを集めて施薬院や病院をたてて、世のためにつくしたことで知られている。そのためか、七堂伽藍四十九院がびつしりと建ち並んだ偉容を誇ったこともあったが、いまはあまりにもひっそりとたたずんでいるのも、栄枯盛衰、時の流れというのには言いつくせない、なにものかが残つてならない。

このご本尊は有名な清凉寺式の仏像で、俗に三国伝来の釈尊の模刻という。情熱をもった青年僧ち、うねんがその悲願から持ち帰ったという清凉寺の仏像、その仏像を模刻した極楽寺の本尊、しかも、その開山は貧しい人びとのために情熱をかたむけた忍性であつたということは、一脈の系譜を知ることができるとように思われる。

長い眉、切長な伏目がちの温容、あるかなしかの微笑、まことに均整のとれたお顔である。その温容に近づきがたいものが感じられるのは、仏像の背後に忍性の強い個性と、情熱が秘められているせいであらうか。

歴史のなかでちようぜんとしているこのみ仏に仏教のありかたが偲ばれてくる。

(石上善応)

目次

巻頭のことは	人間主在の仏教を		(1)
随想		静永幸英・筒崎啓子・佐藤良純	(2)
成道会		林真彦	(4)
創刊三十周年に寄せて			(6)
この孤独なるもの	女子実践仏教を終つて		安居香山.....(9)
.....			
近世文名録	大島徹水僧正		高橋良和.....(12)
仏教人生訓	土と女の性		宝田正道.....(14)
一言放談	念仏許可の人		渋谷賢応.....(16)
浄土のこよみ		大橋俊雄	(18)
すばらしい祐天の法力		松崎仁三郎・中島正方	(20)
家康と三河一撥		鶴田湛泉	(24)
	ご法語をいただく		村瀬秀雄.....(32)
	編集後記		(33)
.....			
日本浄土教物語	弘経寺系僧侶の進出と展開		鈴木成元.....(28)

ただひとすちに仏の本願を信じて、
わが身の善惡をかへり見ず、
決定往生せんとおもひて申すを、
他力の念仏といふ。

法然上人御法語



人間主在の仏教を

日韓条約批准で国会は大荒れした。玄海灘よりもひどく揺れ動いた。しかし、その動揺も根源をさぐれば、自由・社会のイデオロギーのぶつかり合いであり、国民全般は完全に疎外された形であった。

いまさら、わが国の政党に良識と寛容を求める方がムリかもしれないが、もし何とかならなかったかというものが、いつわらぬ国民の声であろうと同時に、このようなことのくりかえしは、結局、公明党の発言と名分とを正当づけることになるであろうことは自明である。仏教精神を以って政治を律するとは彼等のうたい文句であるが、その仏教が狭量偏見な正宗信仰であることもあきらかなことである。

現在の社会は経済と政治を通してのみ営まれていると思われているが、こうした考え方自体がすでに抗争を前提としているのであって、そこにはなんら人類的な理想主義は存在し得ない。対立・抗争を打破することこそ真の政治であり、経済のあり方でなければならぬはずである。それには、対立・抗争を生む根源、つまり人間自体のあり方にもっと注目せねばならない。——この真実の人間の在り方に対して決定的な光を投げかけたもの、これこそ仏陀釈尊であり、本月八日の「成道会」は、この意味で人類歴史の上で至重の意義があるのである。

現在の仏教界は政党にもまして「人間不在」の教理論か、他には、俗塵にまみれきった教団形態論に終始している。成道会を期して、より深くより誠実に、「人間発見」につとめ、「人間主在」の仏教の樹立に挺身すべきである。

(N)

座 る

静 永 幸 英

(淑徳学園中・高校校長)

十月三十日の土曜日の午後から三十一日にかけて静岡県三島の竜沢寺に参禅に出かけた。同行は十五名。全部東京都下の私立高等学校の先生ばかり。

昨年文部省がやっと、今になって『期待される人間像』を発表したが、我々は此の発表よりずっと以前から、文部省が言わんとしていたことを、大いに研究し論じ、且つ発表し、尚、その上に身をもっておのずから体験し、学生を指導しようとしている先生ばかりの団体である。

この団体の中には、仏教関係の学校の先生あり、キリスト教関係の学校の先生あり、或は又神道関係の学校の先生又は宗派に何の關係もない所謂俗人で、取りあわせは各種各様。少しも宗派教派にとらわれないで、ただ本来の人間をつかみたいとの熱意を持っているものばかりの集りである。

よい生き方

筒 井 啓 子

(主婦)

九品仏で開かれた、大正大学女子実践仏教の会に集まった二十名足らずの若い方々は、皆、素朴で、素直な方ばかりでした。なかには、円覚寺へ参禅して、朝の三時から、夜十時すぎまで坐り通したと云う方もありました。この若さで、何を求めて坐禅をされるのであろうか……私は、そんな思いをしながら、合掌しつつ静かに歩いて行く後姿を見ていたのです。境内の木々は紅葉して美しく、秋の日ざしは、廊下の青い絨毯を明るく暖めておりました。私がこの会に参加させて頂いたのは、関口真大先生の著書「禅とは何か」を読み、深く心を打たれて、不躰にも先生にお手紙をさしあげたことが御縁で、この日、法衣を着けられた先生から、坐禅のやり方、心得などをくわしく教えて頂いたのです。

私は、つい最近まで、宗教には凡そ無関心に生きて来ました。生れつき「我」が強く、

樹下石上に思うこと

佐 藤 良 純

(大正大学講師)

インドに滞在中のこと。デリー大学の広い構内に、ほとんど平坦な平野の続く北インドにはめずらしく、小高い丘が走っています。露出した岩と、灌木の茂みは、孔雀、オーム、リス、サル、ジャッカル、野兎などのすみ家であると同時に、人々にも心地よい散歩道を提供してくれます。歴史的には一八五七年、ヤボイの反乱で知られるインド独立運動の初頭をかざる戦場がこの丘で行なわれ、多くの血が流され、奥深いヤブの茂みのあちこちには、そこに倒れたイギリス軍人の記念墓碑が散在しています。

この丘の一日は、カン高い孔雀の鳴き声に始まります。やがて日の出少し前、今度はハラの底からわき出る様な人の叫び声があちこちから起ります。幾人かの人々が、各々、林の中の岩の上に坐り、坐禅の様なポーズをとりながら聖なる音、オーム、をくり返し、朝の

私がまあ、言わば団長格である。東京都下二百五十校の私立高等学校の先生達が国語、社会、数学、理科等の各教科の研究会を作っているが、それらの研究研修会の中の一つに道德宗教研修会というのがあって、その世話役会長を小生がやっている。そうしてその研修会に東京都から十五万円程の研究助成金を頂戴している。

夕方の六時から九時まで禅堂で座った。朝は三時半に起床。水を青竹の柄杓一ぱい口にふくんでうがいし、それだけですぐ禅堂の座につく。すでに数人の雲水は座っている。窓は開けっぱなしで夜明けの涼気は背中から、ゾクゾクと身にしみてくる。それとなしに眼を開いてよく見ると、外国人もいる。懸命に座っている。こちらまけじと座った。が仲間うまくいかない。けれども皆真剣に座っている。五時頃より、ほのほのと夜のとばりが開かれて明るくなるにつれて、何とも言われない爽快な朝がおとずれてきた。

境内は、観光客もシャットアウト。静寂そのもの。

すべてを自己中心にしか考えることの出来なかった私は、自分の周囲の人を傷つけ、悲しませたことがどんなに多かったかと、今に思っています。そのくせ、いつも空虚な思いに追われるように、自分の外へ外へと生甲斐を求めていたここ数年間は、私なりに本当に苦しい日々だったのです。このままではどうしようもないところまで、自分の「我」というものの重みに喘いでいたとき、「禅とは何か」と云う題名にひかれて読み進むうちに「自分」というものが全くなかったとき、その人はいちばんいい生き方をしている」という言葉にぶつかって、思わず目の前が明るく開かれたように思いました。私はこれからの生涯を「いちばんいい生き方」を掴むために努力しようと思えます。

しかし、人の心というものは、正しく生きようと思うそばから、様々の雑念が起るものだということもわかりました。そんなとき、私は心にくり返します。「自分というものがまったくなくなったとき、その人はいちばんいい生き方をしている」と。

精神統一と同時に一種の健康法を実行しているのです。日中の暑さをさけ、一定時間の坐禅がすむとそのあたりを散歩し、やがて町へとおりと行くのです。続いて通路工事や建築の仕事に従事する下層労働者の女達が、歌をうたいながらこの丘の道を通って行きます。昼のさかりをすぎると、大学生などが樹の下岩の上にこしをおろして勉強したり、思索にふけったり、議論に花を咲かせたりしています。夕ぐれともなると二人づれ……大体は御夫婦ですが……が三々五々、散歩を楽しみ、日がとっぷりくると野兎が道のまん中に飛び出して来て、通る人々を驚かせたりします。夜がふけてくるとジャッカルの遠吠が、一寸無気味に聞えて来ます。つまりこの丘では人間と動物が共に樹の下、石の上に、一種の交響楽をかなでているのです。むずかしい理くつなしに、人々は何か心のやすらぎを得、満足を得ているわけです。

今日の日本、特に都会ではこんな雰囲気はなくなり、若者はエレキとか云う強烈な音をかきたてています。けれどもこれも又、彼等にとっては、心の休まる場所なのでしょうか

成道会

林 真 彦

(芝学園図書館長)

ました。これが世にいう「出山の釈迦」であります。

この成道を記念する日を、今は十二月八日ときめて仏事法会を行っていますが、それが成道会であります。

しかしこの十二月八日ということは、古い文献にはなんらの確定した記録はなく、ただ諸經典によって見ると、成道の日は二月八日、二月十六日、三月八日、三月十五日、などいろいろちがっているようであります。

成道とは、成弁仏道、成仏得道の略でありまして、仏道を完成することであります。道とは、菩提であり、『さとり』を意味しています。ですから、成道というのは『さとり』を完成して仏陀になるということです。

釈迦は二十九歳で世の無常を感じて、父母妻子をすてて、王宮をあとにして、修行のために白馬健陟に乗って、従者車匿を従えて出離出家しました。それから六年余の歳月の間、様々な苦行求道生活の後に、三十五歳のとき、ブッダガヤの菩提樹の下で、深い禪定思惟の末、宇宙人生の真理を払暁に明星を仰いでさとして仏陀となったのであります。

この成道ということは、仏陀だけにいうことであって、他の仏教者が、『さとり』を開くことではありません。

この成道の日、釈迦は「雪山」を出て、衆生済度に出られ

またセイロン、ビルマ、タイなどの南方仏教では、釈迦の誕生も、成道も、入滅も、ともにヴェーサカ月(四、五月)の満月の日であつたとされて、この日にヴェーサカ祭(南方仏陀祭)を催して成道をも記念することではありますが、日本でも古く平安朝時代には、三月十五日に行われていたようであります。中国で臘八(十二月八日)説が行われる様になって、やがて日本も、禪宗からはじまったことではあります。成道を記念する成道会を十二月八日に行う様になったのであります。

ことに鎌倉の円覚寺、鶴見の総持寺、京都の相国寺、越前の永平寺などの禪宗の大寺の僧堂では、十二月一日から八日

の早曉までの七日間、不眠不休で釈迦の禪定思惟による成道にあやかた、坐禪をつづける習慣があります。これがいわゆる成道会、または臘八会でありまして、或は臘八接心、臘八大接心ともいわれています。

この接心の七日の夜、或は八日の朝には、茶粥、甘酒、沢庵などが出るのであります。また八日の朝、問答が済んだあとで、掌に小豆粥を載せて食べる寺もあるとのことでありました。また粥には昆布、串柿、菜、その他を混ぜて食べ、之を五味粥といっているのであります。こうしたことは釈迦の苦行をしのぶ厳格真剣な修道でありましょう。

浄土宗でも、芝の増上寺では、十二月四日から八日まで法会と、説教が行われて、本堂に大きな花蠟燭が灯され、信心深い信徒が数十人集まって、説教を聞き、又僧侶と一緒に誦経し、法会の終りに寺僧が五色の散華をまき、参詣の人々が争ってこれを拾って、魔除けとした。という記録があります。様に成道会が行われていたのであります。

この成道会にあたって、しみじみ思うことは、釈迦が王宮をあとに出家して、六年余の求道生活の間、外部からおしよせてくるすべての悪魔外道に打ち勝たれたことは、なみだいていの努力ではありませんが、更に更に大きなことは自分自身の心に打ち勝った事でありましょう。私たち人間は、自身自身の中に善い心と、悪い心を持っています。そしてその悪

い心を取り去ることがどんなに困難な事か、しかしそうすることがどんなにか大事なことかはいうまでもありません。だがその困難を釈迦はなし遂げられたのであります。

しかもその上に、私達は人を悪い方へ引き入れようとする誘惑の様々のあの手、この手のあることを忘れてはなりません。またこの誘惑にねらわれていることも忘れてはなりません。

釈迦はこの外からおしよせてくるあらゆる悪魔の誘惑をしりぞけ、それに打ち勝ただけでなく、自分自身の心の中にある悪魔にも見事に打ち勝たれたのであります。そこに大きな、尊い意義があると思います。

けがれた心を取り去って、清らかな心の目を開いて、すべてのものを見てゆかれたところに一大真理の発見があり、『さとり』があるのであります。これこそが成道であります。

この『さとり』の喜びを説くために釈迦は雪山を出られました。そしてこれが仏教として説かれ、人類の幸福への道が示されたのであります。仏教は宗派によって説くところも、その実践の行もまちまちですが、結局はこの釈迦の『さとり』から出発しているのであります。

この『さとり』の真意義をよく理解したならば、この人の世を、生き甲斐のある明朗なものにすることが出来るでありましょう。

創刊三十周年に寄せて

不求自得について

椎 尾 弁 匡

(大本山増上寺法主)

時々布教者等から浄土教は現世の利益が無いから広めにいくとの泣きごとを聞く。真に意外の事である。選択集に念仏大利、無上功德と言うも延年天寿等の福利を不求自得の得分とされる事でも明らかと思うに係る言を聞くのは何故であるか。その人々がまた現世祈禱（きとう）や新興宗教を一言に迷信として排斥（はいせき）しようとされる。それでは浄土教に迷信が無いから広めにいくとなる。愈々吹き出す様な言い分である。

仏教に生老病死と並ぶ不求自得の苦というのがある。何でも欲しいと求めて得らるれば嬉しい様であるが一つ得ればさ

らに一つ、十万もうければ二十万円欲しい方が十万円の欲より激しくなる。それが得られぬからもっと苦しくなる。もがく、あせる、苦しむので命も縮める。大利、大慈に念仏する生活は延年も福利も自（おのずか）ら得られるから安らぎ、長生きし満足する。名と体と離れざる絶対弥陀の名号に全てを見るものは幸いである。

浄土三十年

和田 正 系

(淑徳大学教授医博)

「浄土」も三十年になりましたか。

ずいぶん長いようでもあり、また本当に夢のような気もし

ます。太平洋戦争が間にはさまっているのですから。

想い出して見ますと私と浄土とを結びつけて下さった方々が、あまりにも多く故人となられたことに驚きます。

鑽仰会の創立と「浄土」の発刊とを知らせて下さったのが当時宗務所に居られた島野禎祥師でした。その紹介で明照会館向い合せの鑽仰会に遊びに行つて親しくして頂いたのが赤尾光雄師、更には中村弁康、佐藤賢順、真野正順先生までお訪ねして何かと教えて頂きましたが今はみな故人です。佐藤先生にはわが家の本尊様の開眼をして頂きました。わざわざ遠くお出でを願いました大島徹水大僧正や吉田絃二郎先生も既に亡くなられて可なりになります。思えば深い御縁であります。

心の友として

村田 嘉久子

浄土三十年記念とは誠に目出度い限りで心からお喜び申し上げます。

たしか創刊号の頃は私拝見していなかったと思いますが其

後かなり長い年月この浄土のために大変教えられて今日まで来ました。もともと有髪の尼、などと言われておりましても私自身至らない人間なんですから信仰やその他の事についてもなかなかむずかしい点があるのですが、この浄土のお蔭で随分勉強させて頂いて居ります。

私は、ほとんど床についた切りの知人や又は何か悩んでは訴えて来る友達などに読終った浄土を送って上げて大変喜ばれております。

歓喜踊躍

小 俣 昌 雄

(品川・行慶寺住職)

戦中・戦後の困難を貫いて三十年：「浄土」がかかげて来た、法のともしびは尊い。心から敬意とお祝の言葉を捧げます。

法然さまは「師の説の伝習は易きなり、然るに我は諸宗みなみずから章録をみて心えたり」と仰せられています。善導さまの観經疏の真意を、じかに御自身の心でお受け取りに

なられた様に、法然さまは、類型的なものの見方や、過去の權威によりかかった生き方をなさらず、常に、み仏の心と大衆と、じかにふれ合う、みずみずしい心の方でした。

私達が法然さまに仰ぐ心は、この求道の姿であり、その清冽な心であります。

「浄土」が、これからも、み仏とじかに呼び合い、心の奥から、ほとばしり出る法悦をもって、私達のよき師とも友とになって、常に潑刺とした活動を展開されん事を、心からお祈り致します。

陰の力

大 門 俊 我

(福井・善導寺住職)

テレビの人気番組の一つに「私の秘密」というのがあります。その最後に毎週一人ずつ、人が変って有名人が登場し、所謂「御対面」なるものがあります。アナウンサーのヒントに導かれて、十年前或は二十年、三十年前に、深い因縁のあった人、大変御恩になった人を糸をたぐり出す様にして漸や

く思出し、中には懐しさの余り互に抱き合って泣き出す、全く涙の御対面もあります。私は非常に強くこの番組に心ひかれるものを覚えます。たとえ有名人でなくっても、我々人間一人一人が三十年、五十年の生涯の間には、どれだけ多くの人の陰の力に育てられている事でしょうか。一つの仕事も亦その通り、一冊の小雑誌といえども、その陰の力が偲ばれます。私は新しい浄土を手にする度に、その陰の力に合掌せずにはいられません。然も嘗々三十年の偉大なる過去現在の陰の力に、衷心感謝の念を捧げて浄土発刊三十周年記念の御祝いの言葉と致します。

お 願 い

読者の皆様には平素よりの御講読、感謝いたすところでございます。弊誌も皆様の御厚情によりまして、歩んでまいりましたが、今般諸経費の値上げにより講読料を上げざるを得ない状態になり、新年度より年額七百二十円也に改めさせていただきます。突然のこと、恐縮のかぎりですが、御賢察の上今後共一層の御支援にすがりたく存じますので御協力の程お願い申し上げます。

大正大学で、つい先頃、在俗の女子を中心とした修養会を、名利、九品仏で行なった。

朝五時の起床から始まり、曉の静座、おつとめ、掃除、講義、そして又静座と、ぎっしり

行事はつめられていた。その間には楽しいコースや散歩もあった。広い境内で、黄葉

の大きな木が、秋の情趣を一段とそめていた。女子学生達の動

きの中には、厳肅な中にも、なごやかな、楽しい空気が流れつ

づけていた。二泊三日の修養会ではあったが、参加した二十数

名のものは、真剣に仏道修行と、人生の反省につとめた、よい会であった。

こうした修養会は、別にこちら側から強要したものでなく、

学生の方から進んで求めてきたものであった。

「切角、仏教大学に入ったのだから、何か

そうしたものを得てみたい」

こうした願いが、この修養会となったのである。それだけに、参加した人々も、おのず

から真剣味があった。ところで、私がここで

筆を取ったのは、その会の座談会での一人の女子学生の話について、大いに感ぜしめられ

るものがあつたからである。

その学生は、父を早く亡ない、又母も高校生

のときに亡ない、今は、兄の力に助けら

この孤独なるもの

—女子実践仏教を終つて—

安居香山

(大正大学助教授)

う事であつた。その悲しみを越えて、更に人間の孤独というものを、身にしみて味わつたのであつた。

「母はガンの痛みにもだえ、その痛さに叫びつづけました。しかし、私達子供は、その痛さの如何なるものか、その苦しきの何

であるかも知ることはできませんでした。血を分け、肉を分けた筈の母に対し、私達は何もできませ

ませんでした。ただできるのは、堅く手を握つてあげることだけでし

た。そんなに苦しいのなら、むしろ死なせてあげたいとまで思った程でした。この時ほど、私は、人間の孤独なことを、味わつたことはありませんでした。」

こう言つて声をつまらせた彼女は、涙ながらに、人間の孤独と、その救い難い淋しさを訴えた。一座の学生も私も、この訴えにもらい泣きをし、静まり返つた。

「私は、今孤児です。しかし、この孤児である事を悲しみ、孤独である事を皆さんに訴え、同情を得ようとは思いません。い

ある事を悲しみ、孤独である事を皆さんに訴え、同情を得ようとは思いません。い

や、むしろ、それ故に、出来るだけほほえみをたたえ、自己の悲しみと淋しさを、笑いで掩い、楽しく生きる様に努力しています。しかし、そうすればする程、人間の孤独を、尚更に感ずることもあります。私がこの修養会に参加したのも、何かを見い出してみたいと思ったからです」

そう言つて、涙を浮かべながらも、笑い顔をした。私はそのほほえみの中に、彼女自身が持っている強烈な悲しみと、孤独感というものを読みとらずには、いられなかった。

「よい話を聞きました。しかし、君は、自からの悲しみと、孤独を味わった事とを、決して、表面的な笑いのみで、胡麻化してはいけません。自己を偽ってはいけません。いつもふさぎ込んで

いるというのではないが、得がたい人間の本当の姿を体験した君は、それを無にしていけない。それが、又尊い母の死に答える道ではないだろうか」

とつきの事に、私は説教とも訓誡ともつかぬ事を言つて、この一学生の訴えに答えたの

であるが、私の心には何か、物足りぬ空虚なものが残った。

「いや、最愛の妻とさえも、なかなか、とけ込めぬものだ。所詮人間は孤独なものだ」

とつぶやいた私に対して、



「夫婦って、そんなものですか。私は、そんな結婚はしたくありません」

と、すごいパンチを別な女子学生からくらつて、一座はドット笑いでわいた。そして、時のたつのも忘れて、議論はつづけられた。

○

確かに、人間は孤独である。あまりにも孤独な存在である。私は、彼女ほどに、身の孤独を体験していないのであるが、時にその孤独感に、打ちひしがれることがある。生を受け、

死んで行くこの人間の一生、それは、この私だけが味わい、この私だけが、行く旅路なのである。生れ出て来る時も一人であれば、死んで行くのも一人である。人間の心のわだかまりなども、如何に妻や子に語り、親しい友人に語るとしても、解け切れるものでない。所詮、私自身、私の心の中で解いて行く人生の鍵なのである。

人生には、楽しい事も、嬉しい事も数限りなくある。又それ程に、淋しか

らずとも、ここに親もあり、友もある。しかし、それは、人と人との間のつながりの中で、安らぎと慰めを得ているにすぎず、繋がっている人そのものは、みな個々のものにすぎない。そして、それを掘り下げて行くと、孤独なこの私だけが残ってくるのである。私

の好きな若山牧水の歌に、

幾山河 越え去り行かば 淋しさの

はてなむ国ぞ 今日も旅行く

というのがあがあるが、人生はまさに幾山河を越えて行く、孤独な旅人である。永遠の時間の中で、せいぜい百年足らずの人生を送る旅人である。まことに孤独な存在という外ない。

しかし、この孤独な存在という事も、もう少し、反省してみると、凡夫人の哀感でもあるようだ。一度、この世に生を受けたものが、独存の存在であることは、宇宙の真理である。更にいうならば、生者心滅、会者定離という事も、動かすことのできぬ人間存在の理法である。問題は、凡夫人たるわれわれが、この理法をどこまで諦認して、その孤独な存在としての人間を、本当に把握するかという事であろう。これは、言う程に易しい事ではない。又、これが、それ程に易しい事であれば、人生はまことに無意味なものであり、面白みのないものである。宗教も、芸術も、その他もろもろの人間の努力も、みな孤独なる人間を求め、救うために生み出されてきた所産ではなからうか。

そうはいうものの、私自身、こうしたものに対して、確とした解決策を持っているわけではない。むしろ、一女子学生と同様に、その孤独なる人間の存在に、人生の大きな障害を感じている一人なのである。



食 事

こんなとき、私は子供の頃のことを思い出す。或るとき、父と共に、暗い田舎道を、二人で歩いていた。法事か何かの時で、隣り村からの帰り道であった。その時、父は「おまえは、こわいか。淋しいか」

と聞いた。

「こわいよ、淋しいよ。だけど、父さんが隣りにいるから淋しくないや」

「そうだろう。しかし、父さんは、どんな時でも淋しくない。念仏を申せば、阿弥陀さんが、いつもそばにいるのだから」

もうこれは、三十年も前の事である。子供心に、分ったような分らぬような父の言葉にただうなずいていたのであるが、今にして思うと、父の信仰は、すべてこれによって解決されていた様である。今ここで、父の信仰を述べるより、父のこの言葉を、私は、私なりにもう少しかみしめて味わってみたいと思う。

新年度より誌面を刷新することになりました。いろいろ内容を吟味しておりますが支部便りの欄を載せたく思います。簡単なお便りをお待ち致しております。

編集部

大 島 徹 水 僧 正

高 橋 良 和

(中外日報社取締役)

京都の
家政学園
が本年創
立六十周
年になる
というの
で、去る
十月十五
にその記
念式典を
行なった。
もちろん
この学園
の関係者
の一人と
してわた
しもその
六十年史
の編さん
をやった
のである

その記念として、この学園の功労者であり、育ての親である大島徹水先生の胸像を卒業生の千久作会がつくることになったのである。制作は新制作協会の岡本庄三先生で春から制作にかかって、漸く十月十五日の朝岸門主を迎えてその除幕式をあげたのであった。

白い幕を三枝樹学園長の令孫であるかわいい尚栄ちゃんと、頼栄ちゃんの二人が引くと、青銅色の大島先生の胸像が姿をあらわしたのである。とたんみんなはみあげて、二十年前に接する恩師のすがたにみとれたのであった。

ところでこの銅像をつくるについての余聞がある。

というのはこの岡本庄三先生は大島徹水先生のことを御存知なく、もちろん生前には会われたこともないのであるから写真一枚が手がかりである。その写真も古いものであったから大島先生のイメージといえば制作中に訪ねた同窓会の人たちのことばで判断するより方法がなかったようで、大島先生の特長をとらえるのに苦心されていたのである。

夏のあつい日のことであつた。同窓会の幹部の人たちから、わたしに連絡があつて、岡本先生のアトリエにわたしを同行せよというのである。そして大島先生のイメージを話せよというのであるから、実は困ったなと思ひながらその連絡の如く三枝樹学園長はじめ同窓会の幹部の方々とそのアトリエを訪ねて制作中の原型をみて、おこがましくもあれよこれ

よと申しあげたのである。

「大島先生はいつもヒゲを生やしておそれてその上ポストという仇名があったくらい口をあけておられていましたね、それに胸も少しあけて、頬骨ももとのっぺり」

など、思ったことを申しあげると、岡本先生は一々うなずいて一つ一つにコテを入れて早速それにあうように修正されたのにはおそれいった次第で、一寸口がすべったかの思いで退散したのであるが、この度参上してよいよ最後の原型を拝見するとさすが専門家であって、出来あがりは見事に大島先生の特長をとらえておられるのにはおどろいたのである。

ところが、その十五日の除幕式のあとである。大島先生と法縁にあたる岐阜の石川良寛氏がわたしをつかまえて、「おい、あの胸像は大島先生に似てへんぞ、もっと口をあけておられたのをお前を知っているやろ」ということばである。

そこでわたしはいったのである。「そんなことは百も承知であるが、まあ石川さん学園の前にいくらなんでも学園の校長さんが口をあけている姿ではちとおかしいやろ、口をふさいだ大島先生ならあの顔になるのや」

という、石川氏も「そうか、それならええけど」といってくれた。

とんだ銅像余聞になつたが、この大島先生の側面を語るわらい話でもある。晩年増上寺に晋山されてからは大島御法主ということ、東京では御法主として、金欄のお袈裟をかけて檀信徒に接しておられたが、京都にかえられるとあの鉄筋の校舎の中ほどにある小さな畳敷の六畳足らずの部屋に起居して、家政学園の経営に苦心されたのである。

京都市内のどまんなかの四条の寺町の大雲院の大地から今日の東山仁王門の地に移転するについては当時七十万円もの大金を一人で苦心してそれもいただいたお布施を貯えて完成した逸話は思出のものである。

その頃に、先生、幼稚園をやりました、と家政にゆく度にねだったものであったが「まてまてそのうちにやるから、今厚生専門学校をつくらんらんのや」と幼稚園があとになって、戦時中厚生専門学校がつくられたが先生の亡くなってから、十六年もすぎて幼稚園が出来あがったのも、先生にねだったわたしの心が通じたかもしれない。

京都に各宗の学校で毎年開く大蔵会という法供養の展覧会があるが、これも大島先生の発案である。

あのような風格の僧侶は今頃はいなくなってしまった。どこからはじまって、どこから終るのかわからないような茫洋たる態度のなかに、動かし難い一念があるこの先生を慕うのは今の時代においては尚更のことである。

土と女の性

宝田正道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

農の弱味は女の弱味である。女の強味は農の強味である。蹂躪されるようで実は塔載し、常に負けるようで永久に勝って行く大なる土の性を彼らはともに具えている。

——徳富蘆花「みみずのたはこと」

みのりの秋という。収穫の季節である。今年は異常低温や台風に見舞われ、冷害や凶作に泣いた地方もあるようであるが、稲作の作柄は大体昨年なみの出来であるという。農村では、恒例の秋まつりの太鼓の音で豊饒を祝う喜びの神事を行うところも多いことだろう。しかし、農民は忙しい。土に親しんで一年中、何やかやと仕事をしていなければならぬ。そしてその苦勞の割に、収入は少く、田や畑の収獲だけではとても食べてゆけない、と兼業をしている農家は、全農家の八割もあるということである。また、この五年間に、四十万戸の農家が減っているという。工場や住宅用に先祖伝来の土地を売って商売替えをする農家もどんふえてゐる。都市周辺では殊にそれが多い。日本の高度成長経済が、地価の異常な高騰をよんだことでも、それが

うなずけよう。

とにかく、大地を友として生きて来た農村の人々にとって、もはや好むと好まざるとにかかわらず、それを手放さねば生きてゆけない状態が来つつあるとすれば、豊葦原の瑞穂の国も最後である。農家の次、三男はとくに都会へ出て働き、都会の娘は農村へ嫁にゆきたがらない風潮が出来てしまっていて、いわゆる「母ちゃん農業」の時代が、ほそほそと伝統の農地を守っている現状である。

徳富蘆花が、『みみずのたはこと』を出版したのは、大正二年の春である。これは、著者が、六年間、武蔵野の孤村にひっこもって自らミミズのように土に親しみ、ペンならぬ鋏をとっての感興を、折にふれて、書き集めたもので、出版以来十年間で百何版かを重ねた、「土の文学」ともいうべき名著である。

だから、この書の中で言っていることは、今から五、六十年前の武蔵野の面影をバックにみて考えないと、現代人には理解に苦しむ描写がなきにしもあらずである。今日では、もはや、この書に出てくるような自然美豊かな農村風景は、葉にしたくもない。どこをみ

ても「土」のない、コンクリートと鉄筋の団地群の氾濫である。人の心も、カサカサして人情のうるおいさえ、欠けていく一方である。しかし、蘆花の言っている言葉は、たしかに時を経るとも朽ちない名言である。彼は、農と女を共通の特質あるものと見ているが、同時に、「土の上に生れ、土の生むものを食うて生き、而して死んで土になる。われらは畢竟土の化物である」ともいい、「農は神の直参である」「農は人生生活のアルファにしてオメガである」ともいっている。

まことに、「土」のもつ偉大さは、尊い。

その至言は「土と水とが一切の汚物を受け容れなかったら、世界の汚物は何処へ往くであろうか。土が潔癖になったら、不潔はどうなることであろうか。土の土たるは、不潔を排斥して自己の潔を保つでなく、不潔を包容し浄化して生命の温床たるにある」という点で極まる。女性の、ことに「母なる大地」といわれるほどに、母親が土の性と似ている点は、否定しがたい。忍従と包容の美德を備えた女性のあり方は、まさに「土」のそれである。仏教では、女人を「外面如菩薩内面如夜

叉」といったり、五障三徒の徒として蔑む傾向があるが、それは、修行の妨げになるためにわざと敬して遠ざけたのであって、女性の徳が「土」の性を備えることを毫も否定するものではない。

ただ、戦後、「女性と靴下は強くなった」などといって、妙に女の権利を主張する風潮が出て来たのを、これ幸いと、男性をやっつける材料に利用しようとするならば、それは考えちがいはなはだしい、といわねばならない。今こそ、戦後二十年、女性はどう一度ゆっくりと「土」の性を発揮しているかどうか、反省してみる必要があるのではなかろうか。

武蔵野は、すでに農の姿も土の性も失ってしまったが、女性までが、いたずらに男性と平等の権利のみを主張するに急にして、その本来の「土」的美徳を失ってしまうようでは人生の不幸、これより

大なるはない。まして最近では、男性の女性化とともに、女性の男性化が激しい世相である。嘆かわしい性の錯倒といわねばなるまい。秋もやがて闇^たけて、もうすぐ寒い冬が訪れる。大地には霜が降り、雪や氷でその表土は固く凍てつくにちがいない。しかし、それでも大いなる土の徳は、黙々として近くやってくる春のために、植物の根をじっと温めることを忘れないのである。人生の四季を歩むわれわれ人間にとって、この大地のような忍耐と包容を与えてくれるもの、それこそ真の女性の偉大さである。いみじくも喝破した文豪蘆花の「土と女性」共通論を、男女ともにじっと静かにかみしめてみたいものである。

業界一の銅瓦及び銅葺一般金具一式……私の先祖の市の真中の宮及び寺、六角堂、納骨堂及び鐘樓の銅並び手間代一式寄進いたしておき、市の中央で板壁では年々破損手入れで大変、板コンクリートに新調奉納。神様仏様への報恩の奉仕故、安く良く致度く、赫々たる定評ある当方へ御相談願います。他所では出来ない卓越せる技術を以て設計等一切無料。建設者諸負業者も悔を残さぬ様是非御相談を。

東京都文京区春日1丁目9の28
石黒工業
銅瓦職協
相談役問
設計及監
電話 (812) 1551

念仏許可の人

五重相伝雜感（その四）

渋谷 賢 応

茅野市仏教会会長

五重相伝が成満となり伝巻の授与が行なわれる。一器の水を一器に移すが如く、授者と掌を合せて、

「汝この語を持てこの語を持てとは即ちこれ無量寿仏の御名を唱えよとなり」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

すべてが終って念仏許可の人が大勢できるのである。まずはめでたいことではあるが、これが内容のとぼしい形式に墮すると大変なことになる。五重相伝には自ら日程が定められ、それによって推していくのであるから、その限りに於て無理も言えないのであるが、どうしても許可の人となるため

には個人面談の場がほしいのである。それは丁度、禪宗の師家に対するように、直接勧誡師もしくは伝灯師と個人的に対談して、そのなやみをうちあけ教をこう場面がどうしてもなければならぬと思うのである。

念仏の同行は大勢で、一蓮托生は座具の伝とある通り、すべて上品上生の往生許可人であると言うことはいいのであるが、そのような概念的な取り扱いのみでは個人の信は納得しないのである。ここでは信仰の要諦に還らなければならぬし、それは一度は真剣に、個人の個々の、私自身のものとしての信仰を考えて見なければならぬと思うのである。往生記奥書としての小消息の文を、甘く見てはいけぬ。他人が往生できるから私も往生できるわけである。あの人でさえ救われたのだから私も救われなければならぬなどと言うことは、信仰の世界にあり得べきことではない。功ある者も功なき者も、善人も悪人も、共に往生することができると言うことは、だれでもみな往生する条件が同じだと言うことで、言いかえれば、往生するには世間的条件なんぞと言うものは一顧の値すらないと言うことで、そ

んな世間的な善悪を言うようでは信の世界に導入せられていないと言うことを言うものであって、達磨大師の「無功德」であって、真の往生人ではないと言うことである。

真の往生人とは何であるか、果して自分がそれに値するものであるかどうか、このことを一応自分が自分のこととして受けとるとき、そこにはじめて念仏許可の人となり得るのであって、大量生産式に、形式的に伝巻の授与を行ってもそれだけでは意味がないと思うし、そのことが信仰生活のプラスにならないどころかあるときはマイナスにさえなりかねない危険性をもっている。甚だしきにいたっては行人となっても出席しなかった人にさえ伝巻を渡してしまうと言うようなこととさえ平気で行なわれるのである。

「天に仰ぎ地に伏してよろこぶべし此度弥陀の本願にあうことを、行住坐臥にも報ずべし彼の仏の恩徳を、頼みても頼むべきは乃至十念の詞、信ても猶信すべきは必得往生の文なり」

このような感激は微塵もない。浄土宗には厳しさが無いと言うことを聞くがここにいたって又何をか言わんやである。

現今の仏教を論ずる者の、仏教の危機感を説くこと頻りである。しかしながら、危機感の内容を何に求めるかと言うこ

ととなると、説は必ずしも軌を一にしていけない。或る者は新興宗教の跳梁にそれを求め、或る者は既成教団の無気力にその責を認め、或る者は教育の非宗教性にその過を転ずる。すべてみな不当の論ではない。

しかしながら「私は往生できるでしょうか。」「私はなぜ念仏を唱えなければならぬのでしょうか。」「私は念仏によって救われるのでしょうか。」と言うようなことを、他人のことではなく、大衆の中の私でもなく「私自身」の問題として、真剣に提示し、指導しないところにこそ、危機があると思うのである。

五重相伝は浄宗布教の真骨頂である。一般のお別時ではとうてい出し得ない宗教的ムードのあるお別時である。この時に、一人一人、個別に、伝巻授与の前のひと時を、信仰の問題、人生の問題等、親しく語ることができ得たならばどんなに有意義なことだろう。たとえそれが決定的な解決にならなくとも、そのことを通しての信仰的体験は、その人一生の生命の糧として、どんなに強く印象づけられることであろう。このようにして、懇切に丁寧に、手の入った同行人となったとき、はじめて念仏許可の人となるとするならば、仏教の危機感は一度に霧散すると思うのである。

今年も師走^{しはす}を迎えた。も早や十二月ともなれば、先生（師）が借金^{かきん}の返済に走りまわったので、十二月のことを師走^{しはす}というのであるという人もあるが、日本歳時記には「しはす

みよこの土浄

一月二十

雄俊橋大

「は四極^{しき}月の義で、「四時のはつる月」、即ち極^きというのは終るということであるから、四時（春夏秋冬）の最終月、十二月をしはすと呼ぶようになったらしい。

シッタルタ（釈

尊）は一国の太子として生れたが世の無常人生の苦悩を目にし耳にした

彼は、何とかして人生の苦を解脱したいと考え、それにはどうしたらよいものかと思ひあぐんだ。その結果心にひらめいたのは、出家して道を求めたいというのであった。かくて

二十九才の時、無上の栄華と顯位を捨てて出家した。沙門となったシッタルタは多く、の修行者たちと共に苦行をつまめた。修行者たちは終日一脚で立ったり、草の芽や根をたべたり、又いばらの上に寝たりして、これで生天できると信じていたけれども、心の修行もせず、苦行をしてみたところで肉体を苦しめるだけではないか、將^{また}又天が果して真実の人生のおちつくところであるかどうかも疑わしい。そこで心の修行に専念している、アララとかウダラカという仙人たちに道をたずねられたが、仙人はひたすらに思いをこらしめて、静かに修行せよと教えるばかりで、シッタルタの求道心をみたすことはできなかった。彼の求めようとするものとはほど遠い。結局、求むる道は他人に聞くべきではなく、自から体験しなくてはならないことを悟り、独自の修行をつまめる決心をなされた。尼連^{にれん}禪河^{ぜんが}のほとりで断食苦行をなされたが、肉身おとろえ、肝心の求めようとする光に接することはできない。健全な身体によって、正しい思いをこらすことによって、悟^きりを得ることができるかも知れないときとった彼は、尼連禪河

に入って沐浴し、一少女スジャーターの供養する牛乳をのんで氣力を恢復し、すすんでガヤの菩提樹の下に吉祥草をしいて坐り、「等正覚を成ぜずば、此座を立たじ」と誓い、数日を経て悟りを開き、仏成道の自覚を得られたという。時に三十五才の十二月八日、曉^{あけ}の明星が東天にかがやく頃であった。あれから六年の歳月がたっていた。

十二月は臘月ともいわれるから、十二月八日は臘月八日。略して此の日を臘八^{ろうぱ}という。釈尊の成道の喜びを記念するため、古くから成道会が修せられている。成道会は臘八会ともいい、灌仏会（四月八日）涅槃会（二月十五日）と共に、釈尊の三仏会といわれる。

臘八や我と同じく骨と皮

一茶

臘八や仏にまさる紫衣の僧

万朶

宝徳元年（一四四九）十二月十二日隆堯がなくなった。浄土宗が發展した背後には多くの僧たちが、熱心に教えを聞いたことを忘れてはならないが、そこには徳者といわれる人もいれば理論家もいた。現世をのがれて山里に静かに念仏する僧もいれば、進んで民衆に布教した僧もいた。隆堯は数少ない布教僧の

一人であった。彼は初め天台宗の僧であったが、三部仮名鈔を読んで浄土宗の人となり、清浄華院の定玄について修行した。三十六才のとき、近江の金勝寺にのほったが、この寺は古くから天台宗の寺院として女人結界の地であった。女人に法を説こうとしても、それは許されないことであった。法然は求める人には誰彼の差別なしに法を説いたけれども、金勝は天台のため許してはくれまい。そのため山を下り、金勝山のふもとに浄嚴坊というささやかな道場をたてて、布教に専念することになった。彼は靈夢とか、おみくじを例にとつて、念仏をとえれば、このような利益をうけることができるから念仏せよと説かれた。その話も遠い昔のことではなく、今の世の物語りであつて、耳にしたこともあつたかも知れない具体的な事実を語った。それだけに説得力もあつて、強く人々の胸にひびいた。彼は「称名念仏奇特現証集」を書いているが、そこには年月日も人名も、場所も正確に記録されていて、見るものをして、当時の人たちに布教したあとをまざまざと教えてくれる。

二十五日には知恩院で、御身拭い式がつとまる。御影堂に安置されている法然上人のお像の塵を、門主自から白絹でぬぐいきよめるという式で、衆僧の見守るうちにおごそかにつとまり、この日本山近くのめくまれぬ人たちに、うどんの接待がなされる。もう此の頃ともなれば、町ではジングルベルの歌声が



京都知恩院

きこえ、せわしい毎日がつづく。そして大晦日をむかえ、除夜の鐘に今年一年の思いわずらいを忘れ、厄をすてて行く年をおくろうとしている。

人間にはいろいろの煩悩があり、執着がある。すなわち、私たち凡夫にはとかく心をみだし、さとり道に入るのをさまたげる心が

おこりやすい。むさぼり・いかり・おろか——そのような心を仏教では貪瞋癡の三惑といひ、俱舎ではこれに十九種あるとか、又唯識では二十種あるというているが、大智度論には百八もあるといっている。百八は人間のおこす煩悩の数であるという。

地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に輪廻している人たちを、迷夢からさめさせるために、梵鐘を撞くのであつて、静かにつくのは仏法の因縁をむすぶためであり、早くつくのはさとりを成ずる因縁を得るためであるといわれる。室町時代以降に造立された梵鐘には百八の乳をもっている。

除夜の鐘がつきならせられたのは何時の頃であつたか定かではないが、室町時代の頃であつたかも知れない。余韻のおわるのを待つて撞く鐘は、およそ一時間を要するけれど、深夜に鳴りひびく鐘の音は人心に深い感銘をあたえる。

とし守夜老は尊く見られけり 蕪村
除夜の鐘鳴り終りたり東山 北人

山田の布教

祐天は年来の望みであつた廻国修行に出ることに決心した。時に元祿元年五十二才であつた。先ず常陸国（茨城県）鹿島神社に詣で次に、伊勢参宮を志し、夜を日について道を急ぎ山田に着いた。そして町家に宿をとり、大神宮に日参した。その念願は、

大神宮は、神州随一に渡らせられる尊いお宮である。この町の人は、大神宮が本地の弥陀如来である事を知らないから、ただ一遍の念仏すら称える風習がない。そんな所から此所では、三衣を着けた僧を喜ばず、かつ念仏の尊さも知らない。しかし、それでは臨終の時が思われる。真に不便な事だから、どうか大神宮の御託宣で、弥陀を尊ぶのは、神を敬するのと相通ずる事、仏法の大切な事を衆生に示されて、末代までの見せしめに一つの奇瑞を現はして頂きたい。

と風雨を厭わず日参した。

或る日、不思議な事が出来た。そもそも、山田の神主長官は総禰宜の頭である。又別に十二人の頭もいた。その時の長官は、至って

すばらい祐天の法力（四）

方 正 島 中
郎 三 仁 崎 松

心掛けのよい方で、一人の娘があつた。眼の中に入りたい程の可愛さだが、あいにく大病にかかつて、命が今日か明日かとなつてしまつた。それで、両親は申すに及ばず、一類親族は、まるで暗夜に灯火が消えかかった様な心地である。良医を尽し諸神に誓願したが、更にその験しがない。長官は、余りの悲しさに、

自分は、勢州神職の総頭として、大神宮を守護し奉つて参つた。この度一人娘が大病にかかり、存命覚束ないので、しきりに祈っているが何の験しもない。若し神の力で叶わないならば、立所に娘の命を取つて、早くこの苦しみを楽にして貰いたい。これこそ一生のお願いです。

と狂氣の様になり、精進を続け潔斎して、社壇を飾り供物をして祈りに祈つた。そして、神子に神託を伺わせた。すると神子は口ばしつて、不思議なことを言いだした。

汝は、長官の身でありながら、娘の病氣全快を祈っている。しかし定業には極まりがあるから、なかなか神力では及び難い事もあるのだ。それなのに様々に恨みそしめるの

は、神威を恐れない仕業で、長官として実に有るまじき振舞だ。だが、汝がせつない心はよくわかる。之を憐んで、神子を使として示してやる。この頃東国から名僧祐天という者が、この地に来て日参いたし、仏法の繁昌を願っている。この者は、汝が長官であることを知らないで、毎日汝の門前を正午に近い頃通っている。之に頼んで念仏いたし、不思議な法力を頼んだならば、娘の病氣は全快する。これは、忝けなくも大神宮の御神託であるから、必ず疑ってはならない。

と言い終ると同時に、そのまま倒れてしまい生体もなくなった。長官は、さすがに随一の総司である。今迄は仏法など夢にも思っていなかったのであるが、この正しい神託には、疑いをはさむことが出来ない。そこで翌日門前に人をつけて、御僧の通るのを待って、御名を尋ね、御神託を試みることにした。すると果せるかな、翌日四ツ半時（午前十一時）に一人の道心者が通った。使者は之を呼びとめて、

突然誠に失礼でございますが、貴僧は、祐

天様ではございませんか。
と、祐天はびっくりした。此処は始めての土地だから、知る人はいない筈なのに、わが名を呼ぶとは心得がたい。

なる程、祐天です。してあなたは。

そうでしたか。私は使の者、長官が貴僧にお頼み申したい事があるとのことです。長官に御対面なされて御相談頂きます。

と門内に案内した。祐天は、さては、我が念仏布教が、成就するかと、心中ひそかに喜んだ。いずれにせよ我が名を知るとは不思議だと、長官の座敷に通った。さすがに神主総司の住いである。実に立派な普請で驚く計りである。暫くして装束姿の長官が見えた。祐天の前で、威儀を正し頗る丁寧に

さては、東から当地に参られた祐天師とは貴僧でしたか。始めての御対面よろしくお願致します。お招き申しました子細を一応お聞き下さい。私は当所の神職総司長官です。今年十七になる娘が一人居ります。それが先頃から大病にかかったので、大神宮にお祈りしたのですが、更にその験しが見えず、今では命も且夕にせまり、名医とい

う名医もさじを投げ捨て、親身の者はいても立っても居られない気持です。けれども親として、見殺しにも出来ないのです、大神宮に精進潔斎して祈願し、神子に託宣を聞かせました。すると神子は貴僧の事を細々申しました。それで御招待申し上げた次第です。私は神職ですから今が今まで、仏法を忌わしく思っていたのですが、この不思議なお知らせ、誠に有り難い。何卒御慈悲に、念仏の功力で、娘が病氣全快いたす様、偏にお願い奉ります。

と、女房諸共に願うのだった。祐天は心の中で、さては、神明のお告げで心願満足誠に有り難い事だと、

それでは、仰せに従いまして、大念仏を二夜三日の間勤めます。病氣は必ず必ず平癒いたします。どうかその御用意を。

と、そして、祐天考えるに、この山田では、昔から念仏禁制であるから、この機会に仏道の尊い事を広め、末代迄の亀鑑にしよう、と、堅いかたい決意をされ、長官に向って、病氣平癒の祈禱には百万遍に限るのですから、それをお勤めします。

と、大鐘二個を取りよせて、近親者が打ち寄り、二夜三日大念仏を催した。所がこの山田では前に申した通り、念仏禁制であるのに、大鐘を昼夜打ち叩いて、大勢が念仏するので、町中は太夫神主を始めとして、肝をつぶし、

長官様はどんな訳で、昔から禁制の仏教、之に仕える出家を引き入れられて、修行なされるのだろうか。

と、不審がった。病人は、大珠数をくり廻わした中に、布団を高く積んで正面に臥し、皆は丹誠をこめて称名した。やがて二夜三日の結願となった。すると病人は今迄存命覚束ないと思っていたのでしたが、むくつと起き、

近頃にないいい気持だ。

と、辺りを見廻わし、祐天を見て、

どんなお方ですか。わたしは、念仏なさるうち目をつぶっていました、地藏菩薩に見えました。さても本当に尊いお方です。

と、水を取りよせて口をそそぎ、そして合掌した。長官夫婦はこれを見て、夢からさめた様に、

さても、念仏の功力ほど有りがたいものは

ない。

と、初めて骨身にしみ、

祐天師はどんな徳があつて、大神宮の神力まで、告げ知らせ給うのが。

と、祐天を百拝し、末代迄の証契にと、近親者とも申し合せて、祐天の弟子となり、弥陀仏に怠りなく勤めはげんだ。かく、長官が信者となつたので、山田中の神主太夫、その外にも多数弟子入りして、祐天を尊んだ。

祐天は、念仏禁制のこの地に来て、大法要を営んだ事は大成功であるとし、之を末代迄の記念に、金勝寺という常念仏堂を建立して、自筆の名号を取り納めた。

長官は、今度の御恩にとわが家に預つてある、「神道の巻」を出してお目にかけた。祐天は、齋戒して謹んで披いた。それには、神代の昔天照大神様が、天の岩屋におかれに

の光が輝いた。その時一人の神様が、大神の

御手をとられて、お出ましを願ひ岩戸をしめて、そこに注連縄を張られた。それで日の本の国は、もとの様に明るい世の中になった。

この一人の神は、戸隠明神と言つて、信州（長野県）にまつられてある。その外、種々の神秘なことをのせてあつたが、その奥に浄土三部の大聖の経文があつた。これを見ると、天照大神と申し奉るのは、平地を尋ねまつる弥陀一仏にましますのである。それであるから、山田の神職にしても、念仏を嫌ういわれはない筈だ。所が年を経ると共に、こんな訳が分らなくなり、それが神職のならわしとなつてしまつたのだ。尊むべきは念仏である。と明瞭に記してあつた。長官始め皆の者は、奇異の思いをした。

抑も、この長官の神秘は、代々祖先から伝つて来たのであるが、この度娘の病氣、祐天の利益によつて、従来の戒を破つて披き見、その極意を知つたことは、これ即ち天照大神の神慮にかなひ、末代迄仏法繁昌の基と申すわけであろう。

祐天は、山田でこの通り布教したのである

から、日本国中何処に行っても差支えない事がわかり、益々精進する決意を堅め、長官夫婦に暇乞して帰った。

それから三年目、武州に帰り牛島の庵室に入った。時に元禄三年五十四才である。

祐天の入寂

祐天は正徳四年六月、幕府から隠居を許されたので、山内真乗院に移ったのでしたが、更に麻布一本松の隠室に閑居し、享保二年六月麻布竜土町の閑室に余生を送った。

ある時、弟子祐海を呼んで

私は、親の考えて出家となったがその後師匠を初め幾多の人々の恩義によって、今日まで真に有難い生活をして来た。それで阿弥陀様のお迎えが、何時来られてもあわない心構えは、とうに出来ている。唯一つの望みは、どんなささやかなものでもよいから、寺を一つ建立したかった。

と、申された。祐海は

御尤もです。私は微力でお役に立ちませんが、その実現には、今後十分尽します。

と、答えた。

享保三年七月十五日、孟蘭盆である。此処は隠室なので、行事も簡単である。八つ時（午後二時）祐天は、急に思い出した様に、袈

裟衣を着けて本堂に出られた。祐海は直ぐその後を追った。祐天は、正坐端然本尊に向って念仏された。そのうしろ姿の気高さ、祐海は唯ぼんやりとみとれていた。師は常に、

富士山は、いつ見ても又どこから見ても日本一の名山だ。只時と所によってその趣が異なるだけだ。その気高い姿は、我々によい手本を示されている。

と、申されて、居間に富士山の絵を扁額として掲げられていた。

祐天は、四誓偈をあげられ、それが終ると、庫裡でくつろがれた。祐海はその折に、今日に限って四誓偈をおあげなされたのは、何か訳がお有りですか。

と、尋ねた。祐天は

いや、別にない。唯私が一番初めに教えられ、一番苦勞したのはこれで、私としてはいつになっても忘れられない。今それを思い出した迄だ。

と、答えられ、別に変った様子もない。そして、暫くしてから

一寸横になりたい。

と、仰せられた。所化達は急いで床を用意すると祐天は、仰向けにやすみ合掌なされた。口で何にやら唱えられているらしいが、声が低くくてはつきりしない。唯唇がかすかに動く程度だ。静かな弱々しい息遣いだ。時々眼をあいて四方を見廻すので、祐海は初め近侍の者は、この容態に注意して、寸刻も側を離れない。果せるかな。七つ（午後四時）過ぎ、なごやかな顔をそのまま、遠い所を見つめる様な眼ざしをしたかと思ったら、そのまま息絶えてしまった。

真に静寂そのもので、崇高というか、神聖というか適当した言葉を見出すのに苦しむ。居合わせた者は、合掌して冥福を祈った。享年八十二才。

遺骸は、竜土町に葬った。その後祐海の力によって、現在の祐天寺が建立されたので、遺骸は竜土町からここに移されたのである。

（結）

七 一揆の計略

大久保党の手強さに、一揆方はこんな計略を企てていた。

一揆と三河の家康

泉 湛 田 鶴

土呂と針崎の両勢を合体して上和田の砦に攻め押したならば、いつもの通り家康が出馬してくるであろう。わざと弱々とあしらって置いて妙国寺方面へ引き揚げたならば、岡崎勢は跡を追って来るに相違ない。その時、あらかじめ伏勢を針崎の森蔭にかくして置いて、岡崎勢の過半が追いつた時、伏兵を起たせて帰路を遮り、一たん妙国寺方面へ引いた味方が取って返して双方から狭み討ちにしてい急に攻め立て、家康を初め大久保党を残ら

ず土井の水田の泥濘の中に追い詰めて一挙に殲滅してくれようと謀議したのだった。

十一月廿七日、こんな計画の許に一揆の兵を二手に分ち、えりすぐった精兵を針崎の森に伏せると、その余の多勢は蜂屋が将となつて上和田へ押しよせ喚き叫んで攻め立てた。

「スワ、ござんなれ」

機をはずさず大久保党も打って出て、ここと三河の猪武者同志の激突となった。

上和田ではかねての定め通り、相図のホラ貝を物見矢倉に登って吹き急を岡崎城に告げた。

ホラ貝の音をきいて、直ちに岡崎城から家康が手兵を率いて馳せつけて来た。

両陣互にしのぎを削って戦っていたが、一揆側はかねての計画の通りわざと軽くあしらいつつ、妙国寺方面へ逃げ出した。岡崎勢はそれを追い初めた。

一揆の殿を本多正信の第三弥正重が引き受けていたが、大久保七郎右エ門忠世が真っ先に馬を走らせして詰め寄った。

本多は鉄砲をかまえて、忠世の近づくのを待っていた。ふとこれに気付いた忠世はひら

り馬を乗りすて、同じく鉄砲で三弥をねらった。

「ババン」

雙方同時に討ち合った。三弥の狙いは狂ったが、忠世の放った弾丸は三弥の股に命中した。忠世がかけよると、浅手だったのか三弥がむくむくと起き上って来て、白刃を互にかざして戦った。勝負が仲々つかないので血気の若者二人は、

「いざ 組まん」

と、打物投げすてむんずと組んで、上を下へと揉み合った。三弥の力がまさっていたのか、終に大久保をねち伏せて馬乗りになると手負を負わされた腹いせに襟もとえ鎧通しを、大地も貫けとばかり突き立てようとしたその一瞬

「待て」

忠世は、三弥のきき腕を握った。

「はざくな、この期に及んで！」

「よくきけ……いかに三弥、君に背いて一揆与するのみならず、昨日までの朋友の好を忘れて、この俺の首をとって、一体、誰に見参に入れようというのか？」

下からにらみすえた。

「何にっ」

本多は怒気をふくんで叫んだが、一瞬ハッとなった。

（なるほど、親友を討ち取って一揆の者共にはめられたとて、果してうれしいか）

こう考えるだけの余猶があった。

三弥はガバと立ち上って、忠世を引き起すと

「忠世、まことそちの申す通りだ。友を討ち取ったとて何の手柄だ……危いところであつたのう」

「おお、三弥、わかってくれたか」

「わからいでか！」

二人は、互に手を握りしめてよろこび合つた。

幼なじみの親友同志が、何の理由もなく無意味な死闘をせねばならぬ愚さに気付いて二人はうち笑って、左右に分れた。

彼等の戦いをしり目にして岡崎勢は、一揆の逃げ行く姿に勇氣百倍しながら、追い討ちをかけたのであつた。

計りことがあるとは露知らないで追い討ち

をかけて来る岡崎勢に、蜂屋はさすがに良心がうずいた。彼の妻は大久保忠勝の伯母であつたからである。

自分等が立てた計画であつたが、妻の一門が悉く土屋郷の水田の沼地に追い込まれ全滅の憂き目に將に逢うとする場合に臨んで、ギョツとした。

（このまま捨てては置かれぬ。狭撃されて全滅の危機にあることを、何としても知らせてやらねば）

そう思つても、今の場合そのことを家康方に知らす方策は何もなかった。思案のあげく彼は単騎で妙国寺辺の高台に乗り出ると、馬を前方へ駆けさせ、又馳せ戻らせたり数回乗り廻した。

「あれは、蜂屋ではないか？」

遙か彼方に、只一騎で乗り廻している姿に、ふと気付いた家康は云つた。

「いかにも、蜂屋にございますが」

「あれを見よ、蜂屋の今日の振舞は、いかさま仔細あるげであるぞよ」

小手をかざして、いぶかしげに首をかき上げていたが、

「ウム、さてはきつと一揆ども妙国寺前を切り切つて味方を遮る計略ありと覚ゆるぞ。

古語にも、上兵は計^{ハカリゴト}を撃つという。なが追いしては、うまうまと彼等のワナにかかるかも知れぬ。いざ早く引きあげようぞ」

そう気付くと、早々に人数をまとめて、さつさと岡崎城へ引きあげてしまった。

一揆方が二手に分れた兵を押し出して来た時には、岡崎勢の一兵もいなかったたので、

「ちえっ、裏をかきおつたわ」

と、渡辺半蔵は地団駄ふんでいた。

この月の末、上宮寺の一揆軍は、馬場小平太、石川新十郎、矢田作太郎等をそれぞれ將として、作岡^{ササマカ}大平に出て来た。岡崎勢も打つて出たので、ここに双方激しい合戦となつた。しかし間もなく、一揆方が随一の大將と頼み切つていた大剛の馬場小平太が、岡崎勢の天野三郎兵衛康景に討たれると、胆をつぶして敗走してしまつた。

この年の十一月は閏であつたが、閏十一月になると、東条の吉良を本多豊後守康孝は酒井左近忠次と共にしばしば攻め襲つたが、降すに至らなかった。

こうした騒乱のうちに永祿六年も早や暮れ、のどかな正月を迎えようとしたが、一揆の蠢動は相変らずやまず各所で攻防戦がくり返えされ、矢叫び鬨の聲が絶えることがなかった。

八 小豆坂合戦

動乱の無気味な空気をはらんだまま、永祿七年の新春を迎え、今日は日本国中はお正月と云うのに、岡崎では一揆の本挙佐崎を攻略するために、作岡太平辺に急に砦を築き初めた。

それを、だまって傍観して置くような一揆方ではない。

どこの家でも年賀の宴を張って、新春を寿いでいる正月三日のこと、一揆勢は砦の構築を妨害しようと、作岡太平の民家に火を放った。火を放って恐怖におとし入れ、混乱せしめようとしたのであった。

たまたまその時、水野下野守信元が松平家と織田家とが同盟を結んでからは恒例の年賀に岡崎城に来ていて、家康と対決の最中であつた。

家臣があわただしく、放火の煙が立ちのぼつたことを告げて来ると、信元に事の次第を語って中座の無礼を謝し、家康は出馬の用意を命じた。

折柄の寒風に吹きあふられた火は、またたくの間にもえ拡がり行き、冬空を真赤にこがして行つた。

家康が出馬しようとする、酒井正親から異外な報告を耳にした。

昨夜おそくまで一揆討滅の軍議が開かれたが、その席に侍っていた大見藤六が、一揆の中へ馳せ参じたということであつた。

「何ッ、藤六が一揆に加わつたとな。正親、今日はゆゆしき大事になろうぞ。藤六め、こちらの計略を残らず一揆方に洩らしているに相違あるまい。そこ許らよく戦を励まれよ。若しわしが討死した時には、きやつ为首切つて手向けてくれ、これこそ二世までの忠義ぞ」

激昂した家康は、いつになくこんな述懐までして、大見の裏切りにガリガリ爪を噛んでいた。

大和田を守っている大久保党に、針崎の一

揆が繰り出して来ないよう押えの使を馳らすと、家康は大久保弥三郎を案内として、霜柱の立った道を愛馬にまたがり白い息を吐かせながら、小豆坂へと押し登って行つた。

そこへ、作岡太平の民家に火を放って凱歌をあげて帰つて来る一揆と、はしなくも出逢つた。

一揆勢は、家康の姿を見出すと驚いて、申し合せたように馬首を立て直して、逃げ出し初めた。

ところが、大見藤六、石川新七郎、近藤新一郎、佐藤甚五郎、浪切孫七郎の五人轡を揃えて踏み止っていた、主君に牙をむいた彼等は、一勢に弓に矢を番え、家康を狙つて放つた。

「ウヌッ」

家康がそう叫んだのは、近藤新一郎の放つた矢が、家康の手綱に当たつたからである。自分狙われたことを知って嚇怒した家康は、馬を駆して彼等の真っ只中へ突中すると、縦横に突いてかかった。するどい気魄の家康に驚きおそれた彼等は敗走し初めた。

大見を初め踏み止っていた彼等は、御家人

の中でも、いずれも名を知られた豪勇の士であつた。それ故、引き上げ振りもきたない容子を家康に見られることを恥じ、又朋友等にも笑われまいとしてか、彼等は馬の足並をカツと揃え、肅々と隊伍を組んで引きとつて行つた。

この時、石川新七郎は朱具足に団扇の指物を立て、貝鞍置いた雪踏の馬に乗り、目のさめるような萌生の手綱を引きしほつて、^{シシガ}殿をしていた。

大見藤六は、黒絲絨の鎧を着、鎧の背にははでなあげ巻き結びの飾をつけ、懸褰目の馬に黒鞍置いて乗っていた。

佐橋甚五郎は、白絲を黄に返した鎧に、紅の大総角をつけ、月額の駒に乗っていた。

浪切孫七郎は、つけ縄目の鎧着て、鶴駁の馬に乗っていた。

いずれも馬上姿も勇ましく、美々しい甲冑をよろうたきらびやかな五月人形のような武者振であつた。

彼等の姿を、遙かに眺めた家康は、

「彼方の本道を静かに引き取る者共の差物を見ると、石川、大見、佐橋、浪切等らしい

ぞ。彼等は一揆の中にも剛の者、一人残らず討ち取つてしまえ」

声高らかに下知した。

「オオ」

と、血気にはやる旗本等、我れおとらじと馬を馳て彼等の跡を追つた。旗本に負けてはならじと先頭に駆けていた水野藤十郎忠重、「金の団扇の指物は石川新七郎と見たはひが目か、穢なし返せ」

^{シシガ}殿をつとめていて引き退いて行く石川にことばをかけた。

呼び止められて轡を引き返した石川と、互に馬を馳せ合せて激突して行つた。

一喝してくり出す水野の槍に、石川はもんどり打つて落馬してしまつた。

一方忠重の相俣の水野太郎作清久は、大見に追いつくと、

「おのれ、につくき藤六、逃さぬぞ」

と叫んだ。

「せがれめ、よらば一矢に射とめてくれようぞ」

弓引きしほつて待ち構えている藤六に、怖れもなければ逡巡もなく、猛然と槍提げて進

んだ。

藤六が清久めがけて満月に引きしほつた矢を放うとした瞬間

「ウーム」

と悲鳴をあげたのは藤六であつた。飛んで来た一本の流れ矢が、彼の腕に突つ立つたからである。藤六が弓矢を捨て太刀を抜こうとする間髪を入れず、清久は槍をくり出し股を突いた。が、藤六も太刀を抜き放つと、清久の甲をハツシと切り付けた。藤六の鎧の小札が堅くて股まで徹らなかつたし、清久の甲もよかつたので何の痛痒も感じない。

水野は槍をすてて太刀を抜いた。

藤六は矢の傷手のため太刀を十分使えず、清久にじりじり押されていたが、終に切りつけられ、

「せがれめ、無念」

虚空をつかんでのけぞり、最後の言葉を残して他愛もなく首をはねられてしまつた。

佐橋甚五郎は、多勢に取り囲まれて奮戦していたが、彼も討たれてしまつた。

浪切孫七郎はうまくその場をのがれて大善坂まで逃げ登つて来たが、その跡から家康が諸鎧合せて追つて来ていた。

弘経寺系僧侶の進出と展開

鈴木成元

(大正大学講師)

関東地方の寺院で大切なのは飯沼の弘経寺である。弘経寺は聖岡の弟子良肇の開山といわれる。良肇の伝記は不明でどのような弟子がいたのか明らかでないが、彼の後に住持となるのは聖聰の弟子了暁である。良肇は了暁を後住に決めるとすぐ小田原に上って伝肇寺を草創した。このような気風が弟子達に左右したのである。弘経寺系の僧侶には活潑な行動にふみきる人が多い。二世の了暁もその一人で、弘経寺を西岡に譲ると愛弟子の訓公を連れて三河に進出し、大運寺を草創した。

明応二年(一四九三)に了暁は後土御門天皇から紫衣の綸旨を賜り、二世の訓公のときになると勅願所となって発展する。従来了暁の評価はあまり高くないようであるが、私は白旗派発展の上で、いや浄土宗史上では忘れてならない人の一人で

あろうと思っている。というのは関東勢が京都に進出する直接の基盤というのは、彼の傑出した弟子達に負うところが大きいからである。

了暁が三河に上った後三世として弘経寺をついだのは西岡である。彼も活動家で寺運の興隆につとめたが、晩年小田原に上って本誓寺を草創した。珠琳が知恩院住持になった理由は明らかでないが、彼は了暁と兄弟弟子の關係にあった慶竺の後をつぎ二世となった。しかしまもなく応仁の大乱が起こり京都はほとんど焦土と化し、知恩院も焼失した。そこで珠琳は近江の伊香立に移ったが、文明十年(一四八八)京都に帰って知恩院の復興に尽力した。その苦勞は並大抵なものはなかったが、再建への道は早かった。青蓮院の尊応は彼の功績をたたえて事実上の開山だといい、長享二年八月九日、



寺経弘の沼飯旧

山林・敷地をはじめ寺領、法楽寺・無量寿院などの堂舎の敷地を安堵したのである。こうして知恩院は元のような経済的基盤にもどったが、それでも不安がないわけではなかった。というのは大乱後の社会は法が徹底しない。勢力あるものの不当な課税が行われる。それでいろいろ運動したのであろうが、延徳三年（二四九）には幕府から段銭・人夫以下の諸公事を免除され荒廃から立ち上り、四カ条の寺内法度まで完成していった。

永正元年（二五〇四）

青蓮院尊応の令旨により珠琳の後には愚底が住職として入山した。愚底は了曉の弟子で、珠琳とは兄弟弟子に当る人である。文明七年（二四七五）彼は三河に上り、松平親忠の援助によって岡崎の大樹寺を草創した。大樹寺は以後徳川家の菩提寺と

なって大きな勢力をもち発展したことはいうまでもない。大樹寺には浄土宗寺院としては全く異例なほど沢山の古文書が現存して学界に貢献している。この文書によると、大樹寺が隆盛になったのは何も徳川氏の援助ばかりでなかったことがわかる。すなわち代々の住持が活潑な行動を行なって漸次堂舎を整備し、田畠を購入して莫大な寺領をもつようになったのである。それらの土地を徳川氏は安堵しただけで、従来いわれていたように徳川氏との関係のみで大樹寺の発展を考えなくてはならない。

愚底は源派に大樹寺を譲ると京都に上り、珠琳の後をついで知恩院の二十三世となった。珠琳と愚底は兄弟弟子であるが、任命権は青蓮院門跡の尊応がもっていた。これは知恩院そのものが青蓮院に附属していたことを物語るものである。宗派の上からは独立していても、法的には独立寺院でなく、青蓮院の支配のもとにあったというべきであろう。愚底の後には訓公がついだ。

訓公は三河大運寺の中興として二世となり、あらゆる面で活躍した人であるが、知恩院に入ってから二十四世となり、十年間住職をつとめて弟子の存牛に譲り、三河の信光明寺に隠居して二世となった。信光明寺は焼失によって史料を失い明らかでないが、松平親忠の父信光の開基した寺であり、了曉の

弟子存問の開山した寺である。訓公の後、存牛もやはり隠居して三世となるように、自然とそのコースが決っていった。存牛が隠居した知恩院へは大樹寺二世の源派が入り、その後は同三世の光熙が入るといふように、これまたコースが決つていった。

このように関東白旗派の興隆は本家である鎌倉の光明寺よりも瓜連の常福寺の方がめざましい。中でもその分家に当る

飯沼の弘経寺出身の

僧侶は団結した組織力にものをいわせ、

小田原から三河へと

発展していった。そ

して三河の松平一族

と結びつき信光明寺

・大樹寺・大運寺を

はじめ、又末に当る

寺院を草創して固い

地盤を築き上げるの

である。そして飯沼

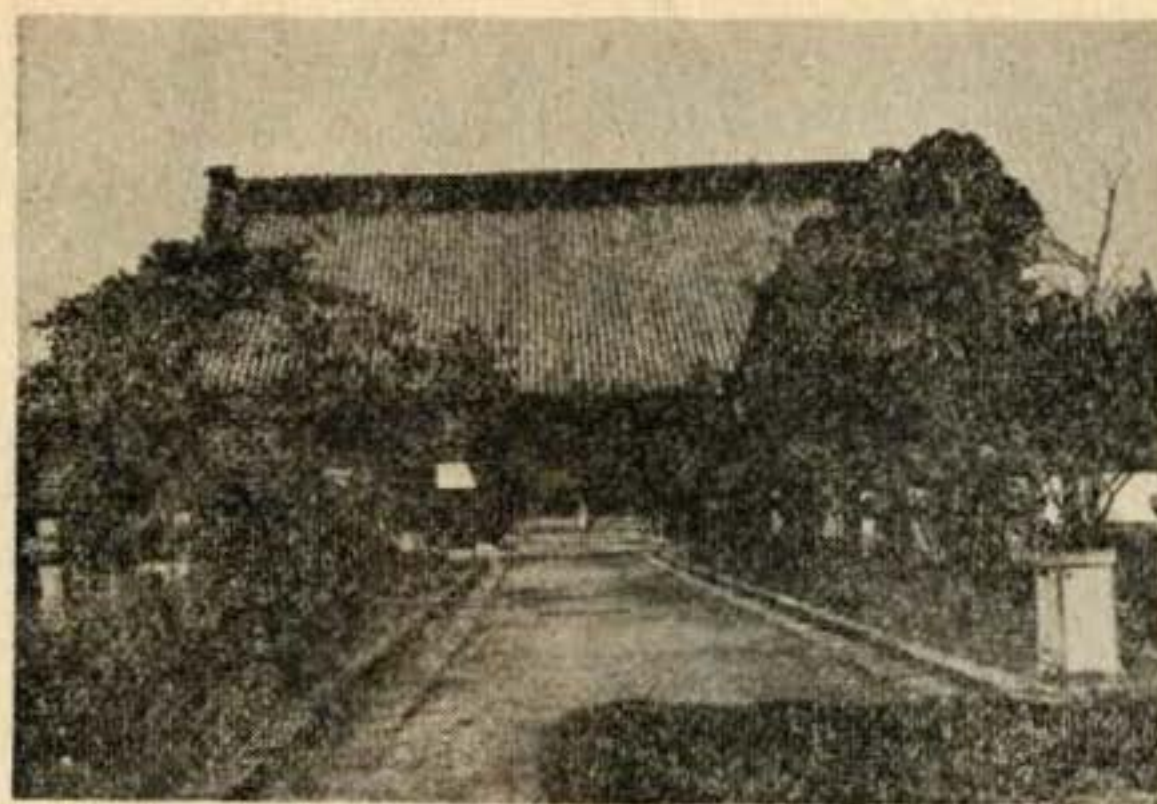
から直接知恩院に入

寺した珠琳との交渉

を密接にし、三河から続々と傑僧を送り込むのである。それは知恩院を復興した珠琳の功績とその力とによるものであるが、珠琳だとして三河からの援助、とくに了曉門下の団結がなかったならばできなかったはずである。そこには単に白旗派系の血脈を重んずるといふ意識よりも、弘経寺系の血脈を重んずるといふ考えの方が強かったと思われる。実際清浄華院では万里小路家から住持を送り、皇室・貴族との関係を深くして独自の発展をとげていたからである。

聖聰の弟子慶竺は関東から知恩寺に入り、嘉吉三年後花園天皇から香衣の綸旨をもらった。このころ知恩寺の勢力は強く、文安六年（四九六）には勅願所となり、寛正四年（一四六三）良敏の代には幕府の祈願所となり、聖然代になると紫衣の綸旨を賜わった。そして後花園天皇の善知識をつとめてからはより皇室との関係を増していった。これは応仁文明の乱が幸いしたためではあるが、知恩寺の位置は優に清浄華院と対比するようになった。

一方知恩院の方は戦乱のため焼失、珠琳の献身的な活動によって復興されたが、旧来の姿にもどるにはかなりの時間を必要とした。こんなところから大永年間になると、知恩寺の慶秀はその隆盛さにおぼれて知恩院の存牛を軽視し、自分の寺こそ浄土一宗の本寺というような態度をとった。そこで知



大樹寺の崎岡

恩院では朝廷や幕府に訴えて裁断を仰ぐ結果になった。そればかりでなく知恩院に味方する青蓮院の尊鎮は京都から姿をくらますという事件まで起り、かなり複雑になっていった。

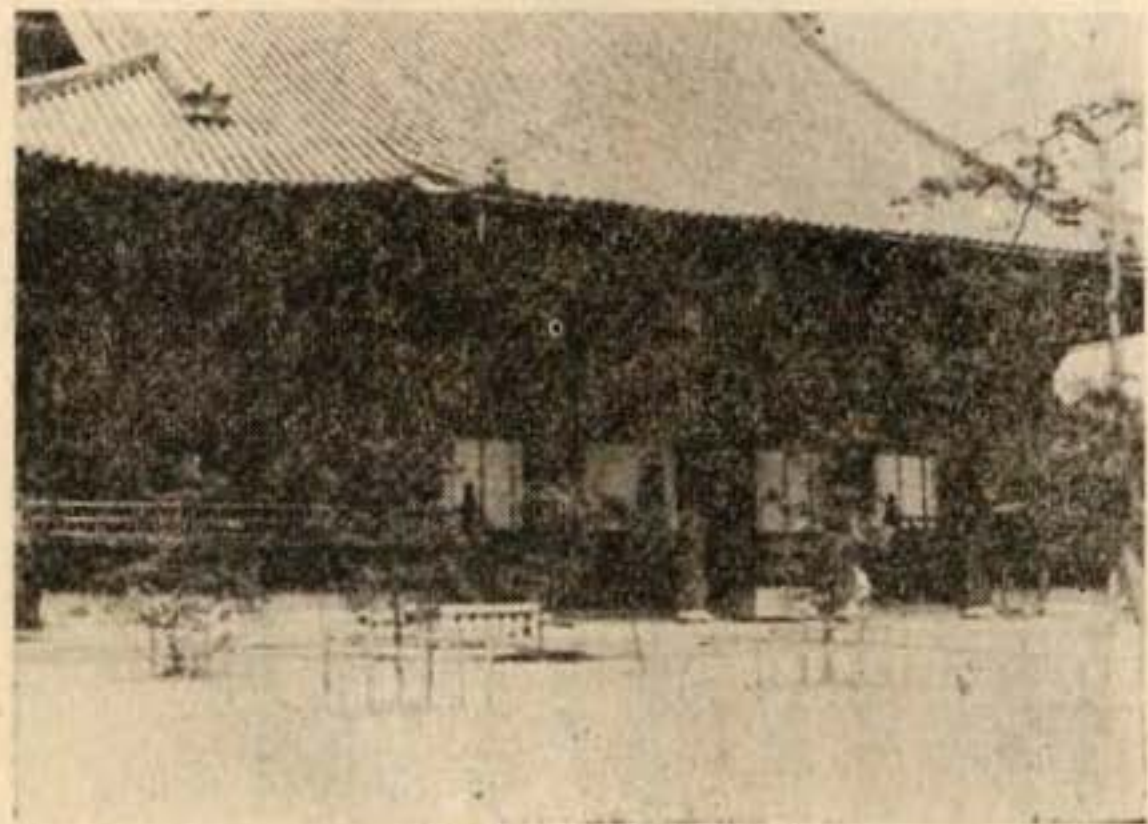
一方慶秀も知恩寺の正統を主張したが、結局はきき入れられなかった。そこで出奔して清水寺に入ったが、幕府の奉行大館常興などに迎えにこられて帰寺した。これは足利義晴が命令したものである。その後知恩寺では再び上申して勅裁を申し入れたが許可にならなかった。結局この論争は知恩院のい分が通り、知恩院の本山が決定し、青蓮院尊鎮も高野山から帰洛してケリがついた。

この両寺の争いは一条派とか白旗派とかいう派閥の争いではなく、知恩寺の伝統的な勢力と、関東から入洛して復興をなしとげ、興隆発展に尽力した新しい勢力が交叉したところにおこった必然的な歴史的抗争といえるであろう。だから知恩寺の慶秀にしてみれば、当然法然の骨が埋まっている知恩院が本山であるという意識は多分にあったことは確かである。彼自身存牛を知恩院に招くときには六カ寺連署の一人として署名しているからである。しかしここには、知恩寺の地位をより一層高めてゆこうとした慶秀の意識を認めなければならぬ。そこに論争の意義があると私は思っている。そしてそれは、関東勢に対する京都勢の抵抗でもあったことを忘れて

はならない。

法然が入寂した後の京都は信空が統卒者となって教団を導き、隆寛は対外的に論戦を張って法然教学を主張した。

しかしこの兩人の入寂後は西山・白川・嵯峨・紫野・多念義など、各派が分裂を起し、弾圧のもとに自派の主張と維持つにとめ消極的な態度に出てぐずぐずしていた。そこに鎮西



京都の知恩寺

流が入ってこれらの門徒と結びつき新しい勢力を築いてゆく。これも分裂して発展するが、その後関東から弘経寺系の僧侶が三河を中継地として京都に入り、様々な派の血脈をぬりつぶして鎮西流正統の血脈を作っていた。

(完)

御法語をいただく

ただひとすじに仏の本願を信じて、わが身の善悪をかへり見ず、決定往生せんとおもひい申すを、他力の念仏といふ。

(念仏往生要義問答)

ある人が法然上人に重ねました。

「お念仏を称える人は誰でも往生できるのでしょうか」

これに対して上人はこう答えられました。

「凡そ念仏には他力の念仏と自力の念仏とがあります。他力の念仏は往生できますが、自力の念仏は往生を願う志がないのですから往生できません」

ある人は更に重ねました。

「それならば他力とはどういうことですか」

この質問に答えられたのが、この御法語であります。即ち第一には阿弥陀さまの本願を信ずることです。心から信ずることなしには信仰となり得ないのは当然でしょうが、阿弥陀さまはどんな凡夫でも救って上さるという

お慈悲を信仰することであります。第二には自分が善人であるとか悪人であるとかいうことにこだわらないことです。自分は善人である、学問がある、良識がある等と自覚し実践することは結構ですが、往生できるかどうかという問題には関係ありません。もし万一この自覚から僅かでも慢心が起りおこる心がのぞいたとしたならば、その人は反って往生できないことになります。

それと反対に自分は悲人である、無学である、貧困であるとか知って、そうでないようにな努力することは必要ですが、阿弥陀さまはどんな凡夫でも扱たて下さるという信仰の邪魔になつてはいけません。反省して自分は愚かな凡夫であると気がつく所に進歩の第一歩があります。それよりも自分は救われ難い凡夫であるから阿弥陀さまにすがるか方法がないと知った時に、本願のありがたさが判るのであります。

第三には自分は必ず往生するのだという信念がなくてはいけません。自分は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天のどこに生れてもかまわないと思うにしろ思わないにしろ、楽天

的に人生に対する関心の薄い人は、信仰に縁のない人であります。

このように三つの態度を以て称える念仏が他力の念仏というのであります。

この御法語には続いて次のような偶話が述べられています。麒麟の尾に蠅がとまっていると、麒麟が一跳躍に千里をとぶと蠅も一諸に千里をかけることになります。世界四洲の王といわれる転輪王のお供をすれば、人夫といえども一日に天下を廻ることができま

す。また大きな石といえども舟にのせて運べば、川を渡って向岸につくことができます。このように凡夫は自分の力で往生するのではなく、またできもしません。しかし阿弥陀さまのお力によって凡夫といえども往生できるわけです。これが他力です。

自力についても同じく偶話を以て述べられています。即ち自力によって往生しようとすることは、一千二百万斤の高さがある須弥山を一本の針を以て打ちくだこうとしたりするより更に一段と困難なことであるといわれました。

(村瀬秀雄)

編集後記

○本年も、はや師走となり
会員の皆様も御多忙な毎日
をお送りのことと思いま
す。編集部も、来年の編集
方針等、宮林編集長を中心
に考えております。

○毎月号に日本浄土教物語
を連載いただいております
鈴木成元先生が、十一月二
十一日に単獨の典をあげら
れました。誌上より御祝い
申し上げます。なお先生の
新住所は東京都板橋区仲町
四四番地で御座居まも。
○なお関西の方々に御迷惑
をおかけしました浄土発行
三十周年記念会は、関西で
行う記念会は、来春となり
ました。関東における記念
会は、十二月六日午後五時
上野精養軒において行うこ
とになりました。又、会員

の皆様には、ひきつづき謹
誌浄土を可愛がっていただ
きまも様に御願い申し上げ
ます。

○先般、東京九品仏様を会
場にして行われました、大
正大学の女子学生の実践仏
教は、誌上でおなじみの安
居、石上両先生の御指導の
お蔭で大成功だったそうで
す。また四年生あたりは、
来春卒業前に近々行なつて
欲しいと申し出があったそ
うです。

○十一月六日、七日の両日
京都仏教大学で開催された
浄土教学大会は、六十名の
研究発表者があり非常に盛
大でした。特に七日の午後
のシンポジウム、往生浄土
の現代的理解では、参加者
全員が熱心に討議を行いま
した。
○会員の皆様の一つ御願い
申し上げます。雑誌浄土に

一つ御意見なり、御注告が
ありましたらぜひ編集部迄
お聞かせ下さる様お願い申
し上げます。又、会員の皆
様の王様を賜わります様、
かさねてお願い申し上げます。

○来年よりは、地方の各教
区の活動等を誌上にのせた
く思っております。各教区
の教区長及び、教区寺院の
皆様の御便り御待ち申し上
げております。

○宗門の諸大徳及び読者の
皆様にお願ひした、雑誌浄
土三十周年に際してのアン
ケート、御祝いやら有難い
御言葉をいただき同人一同
感激致しております。色々
有難う御座居ました。誌
上より御礼申し上げます。
○本年も残り少くなりました
た。読者の皆様も良いお年
をお迎え下さい。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十年十一月二十五日 印刷

昭和四十年十二月 一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

三十周年記念浄土トラクト

- | | | | |
|------------|--------------|--------------|---------------------------|
| ものいう石 | 大正大学
教授文庫 | 竹中 信常著 | 新書判 価 150円
150 P ㇔ 40円 |
| 諸仏の戒め | | 村瀬 秀雄著 | B 6判 価 5円
4 P ㇔ 10円 |
| 四季の寺まいり | 大正大学
助教授 | 安居 香山著 | 新書判 価 25円
20 P ㇔ 10円 |
| —浄土宗の年中行事— | | | 価 80円 |
| 経本 浄土宗 | 檀信
徒用 | のおつとめ 村瀬 秀雄編 | 価 90円 ㇔ 20円 |

修養ひめくり 価 100円・㇔ 40円 用紙33枚
タテ37CM ヨコ13CM

会員のかたには2割引(単価80円) 送料実費

浄土宝暦 価 25円・㇔ 10円 38ページ
(宗祖御影一枚起請文など掲載)

50部以上より単価20円 送料実費

既刊浄土トラクト

- | | | | |
|---------------------|--------------|--------|---------------------------|
| 選択集私解 | 大正大学
教授文庫 | 竹中 信常著 | 新書判 価 120円
120 P ㇔ 30円 |
| 一枚起請文をめぐって | | 村瀬 秀雄著 | 新書判 価 120円
102 P ㇔ 30円 |
| 真理のはなたば | 大正大学
教授文庫 | 佐藤 良智著 | 新書判 価 70円
㇔ 20円 |
| 日常勤行式の解説 | | 村瀬 秀雄著 | 新書判 価 100円
90 P ㇔ 20円 |
| 信仰への導き | 文 庫 | 佐藤 賢順著 | B 6判 価 15円
16 P ㇔ 10円 |
| こ法語
の
しおり 葵ぐさ | | 村瀬 秀雄著 | B 6判 価 15円
16 P ㇔ 10円 |
| 浄土宗のおしえ | 大正大学
助教授 | 宮林 昭彦著 | 新書判 価 25円
20 P ㇔ 10円 |

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会 電話 (262) 5944
振替 東京 82187

申込書

浄土宝暦

修養ひめくり

その他

昭和 年 月 日

◇詳細は紙上広告をご参照下さい。
(ゴジックは新刊)

部 部 部 部 部

ものいう石	百五十円 三十円	部
浄土宗檀信徒用 勤行式(経本)	九十円 二十円	部
四季の寺まいり	二十五円 十円	部
諸仏の戒め	五円 十円	部
浄土宗のおしえ	二十五円 十円	部
信仰への導き	十五円 十円	部
葵 ぐ さ	十五円 十円	部
真理のはなたば	七十円 二十円	部
日常勤行式解説	百円 二十円	部
一枚起請文を めぐって	百二十円 三十円	部
選択集私解	百二十円 三十円	部

郵便はがき

円 手 用
5 切 貼

東京都千代田区飯田町一の二二

法然上人鑽仰会行

御住所

御芳名